

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一5:1~11 「いかに生きるべきか」

[1-2]「兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日は夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです」

これはすでにテサロニケ人たちが、主が再び来られることについて、パウロたちから教えられていたということを示している。主の日は夜中の盗人のように来る。

[3]「人々が『平和だ。安全だ』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それを逃れることは決してできません」 →マタイ24章参照

主の日は突如として来る。ここで言われている「人々」とはイエス・キリストを救い主として信じていない人々のこと。人々が「平和だ。安全だ」と言っているまさにその時に主イエス・キリストの再臨の日は来る。「妊婦に産みの苦しみが臨むように」とは妊婦が産みの苦しみを逃れることができないのと同じように、主の再臨の時も誰も逃れることができないという意味。

[4-5]「しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません」

「暗やみ」…神から離れた不信者、未信者の状態。救いの道がわからない。

「光の子ども、昼の子ども」…神を信じ救われた者、信仰者のこと。イエスは救いをもたらす真の光である。→ヨハネ1:9、12:35~36 このイエスを信じ救われた者は光の子どもとなり、やみの中を歩くことはない。

[6-7]「ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです」

6節でパウロはテサロニケ人たちに光の子ども、昼の子どもとしていかに生きるべきかを教える。「ほかの人々のように眠っていないで」…不信者のように霊的に眠り込んで善悪の判断もわきまえず、神について無関心な態度を取らないで。

「目をさまして慎み深くしていきましょう」…キリストがいつ来られてもよいように心ぞなえをして、神のみこころにかなった正しい生き方をする。

7節では霊的に眠り込んだ状態が夜にたとえられており、その夜に行われていることとして、ここでは眠ることと酔うことが象徴的にあげられている。さらに詳しい描写は→ローマ13:12~13

このように多くの罪悪は霊的に眠り込んだ状態で行われる。主イエスが夜中の盗人のように来られるとき、このような暗やみの中にいる者は大いに驚き恐れ、面目を失うこととなる。

[8]「しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう」

クリスチャンは光の支配する昼に生きる者なので7節のような生き方はしない。かえって、信仰と愛を胸当てとして着け、不信仰やこの世の様々な攻撃から身を守り、キリスト者としてきよい生き方をする。「救いの望みをかぶるとしてかぶる」とは主イエスが再び来られるその日こそ信仰者にとっては救いの完成のなる日なので、その日を待ち望む心ぞなえをしつつ油断なく、慎み深く生きていくということである。→エペソ6:17

[9-10]「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです」

「私たちが……救いを得るようにお定めになった」→エペソ1:3~6

「目ざめていても、眠っていても」とは文字どおりの意味というよりも、生きていても、死んでいてもという意味であろう。主イエス・キリストが再び来られるその時に私たちが地上で生きていても、死んでいても主とともに生きようになるために、主は私たちのために十字架にかかれて死んでくださった。それゆえ主を信じ罪贖われた者として私たちは主を喜ばせる生き方をする必要がある。

[11]「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、徳を高め合いなさい」

パウロの勧めは、すでにテサロニケ教会で実行されていたことであったが、それで自己満足してしまうのではなく、さらにそのようにして成長し神の教会を建て上げていってくださいというのである。

私たちも主がいつ来られるか等と興味本位のことには走る生き方ではなく、かえって、主がいつ来られてもよいように心を整え、慎みをもって神のみこころにかなった生き方をし、互いに励まし合い、徳を高め合って生きることが大切である。